

高良聖先生の授業風景

—ジェネラリストのすすめ—

武藤 翔太¹⁾

【学部】

「臨床心理学」：臨床心理学と他の心理学の違い、臨床心理学分野の発展の歴史、心理療法における技法の違いは何か、などの基礎的な内容から始まり、最終的には自験例の紹介を通して臨床心理学のアプローチについて講義されていた。板書を通したライブ感溢れる授業であり、他学科の学生からの人気もあった。一方、出席点はなくテストだけで成績がつくという実力主義の講義でもあった。先生が生粋の阪神タイガースファンであったため、解答用紙の裏にその日の金本選手の打率を書くと加点すると冗談を言われ、学生全員が真に受けて、テスト当日は解答用紙の裏にも全力を注いでいたことが昨日のここのように思い出される。

「臨床心理学実習」：4回ほどのコマ数の中で、参加者全員参加で古典的サイコドラマを行っていた。解説から入るのではなく、まずは体験から、ということで初回からサイコドラマを全員体験する。「パスを尊重します。だからみんな、無理しないでね!」と明るく言いながら、ウォーミングアップでは和気あいあいとした、そしてドラマの時間になると主役のための真剣な時間がそこでは流れていた。臨床場面と全く同じ集中力・やり方・主役への配慮／尊敬の念を持って、監督をされて

いたように思う。主役になった学生は講義を超えて、自分自身の内面や人間関係、過去の体験を振り返り、そこに新たな体験をすることによって何かしら救われる部分があったことは間違いない。「ゼミ」：今にして思うことは、先生の指導教員であった霜山徳爾先生のゼミのやり方を踏襲されていたのであろうということである。「ガチの人以外お断り」、「来る者拒んで去る者追わずだ!」などの半ば冗談めかした発言が表しているように、先生のゼミには熱意のある学生が集まっていた（実際、学内外問わず、大学院に進学する学生が毎年いた）。3年次のゼミでは、毎週誰かが興味のある分野についてプレゼンすることを軸に、学生間で課題の本を回しながら書く毎月のブックレポート、夏休み中の精神科病院での丸1日の実習と課題映画を観てのレポート、と盛りだくさんの内容であった。4年生の卒論ゼミ（年6回ほどの発表会）に参加することもあり、そこで4年生や院生と知り合いになれることも高良ゼミの伝統であった。課題本は絵本の『葉っぱのフレディ』や山田花子氏のマンガ『神の悪フザケ』もあれば、エリクソンの『主体性』やセシュエーの『分裂病の少女の手記』などもあり、映画も『怒れる12人の男』、『カッコーの巣の上で』、『ビューティフルマインド』など、バラエティに富んでいた。卒論

1) 明治大学大学院 文学研究科 臨床人間学専攻 臨床心理学専修 博士後期課程

のテーマも様々であった。白熊実験やレビー小体型認知症の家族のブログに関する研究、自己愛、うつ病、自傷行為、ゴッホの作品に表れる渦に関する研究、性的に奔放な女性に関する研究、ゲシュタルト療法、ダンスセラピー etc…。ゼミ生には締切2か月前には卒論を仮提出させ一つ一つに丁寧に赤を入れ「年末年始はゆっくり過ごそう」を合言葉に指導をされていた。ディスカッションの時間では常に「その臨床的意義はなんだ?」と、臨床場面や社会への還元について厳しく問われていたことが忘れられない。厳しさもありながら、一方で、学生が関心を持ったテーマを誰よりも尊重されており、テーマ自体を否定されることは一切なかった。そのためか、学生も交えたディスカッションの時間は笑顔もあり、温かく楽しい時間であった。

【大学院】

「臨床心理査定演習」：この講義ではまず、博士前期課程1年生全員が各自、学部生などの協力者3名に個別に連絡を取り、一人ひとりにロールシャッハ・テスト（片口法）・WAIS-Ⅲ・内田クレベリンを実施し、所見を書き協力者本人にフィードバックをすることから始まる。そして、毎週一人に自身が実施した結果の発表をさせ、全員でその結果を検討するという講義である。春学期に開講されている授業であり、その時期、院生は他にも試行カウンセリングやその他の授業発表、明治大学心理臨床センターでのインターン面接や心理アセスメントの陪席など、まだ入学直後の慣れない環境の中、そのやることの多さに忙殺されている。そのため、この授業の課題の労力の多さに追い込まれることになるのだが、結果的に現場に出てから一番役立つ講義の一つであった。

「グループアプローチ特論」：学生に対してソシオドラマやサイコドラマ、さらには継時的なクロウズドの言語による集団精神療法を様々なアプローチ法で実施するなど、熱意のある講義をされていた。寒さが厳しくなる秋学期の限にも関わらず、颯爽と足取り早く実習室に入るなり「さあ、やりましょうか」とすぐに開始される姿が印象的であった。最後の数回でのまとめでは、各回の記録を片手に板書しながら、ご自身の考えを率直な言葉でそれぞれのグループについて解説をされていた。それだけでなく、専門的なBionの基底的想定 of 概念なども実際のグループの流れを取り上げ、わかりやすく説明をされていたことをよく覚えている。

「ゼミ」：修論指導や卒論発表への参加、学会発表の練習など以外には、1冊の本を一年かけて読んでいた。筆者のときは高橋哲郎先生らの『力動的集団精神療法』と、メアリー・J・ピープルズの『初回面接』であった。いずれの本も「おい、いい本見つけたんだよ、これ読もう」と、誰よりもご自身が目を輝かせて言われていたことを覚えている。読み進めていく中で、自身の体験を隠すことなく語られるため、授業や本では学べない現場の空気や“一臨床家としての高良聖”を学び、盗み取ることができる機会でもあった。そのためか、いずれの本も1年では読み終わらず、後半部分は各自が読み込むことになっていたことを懐かしく感じる。

「明治大学サイコドラマスクール（於：心理臨床センター）」：毎月第3木曜日に心理臨床センターで行われていた地域に開かれたオープングループである。東京サイコドラマ協会の関係者や臨床心理士、臨床心理系の学生・院生、明治の修了生はもとより、対人援助関係の方、一般職の方、クリ

ニックに通院されている方など、毎回様々な背景をもつ人々が参加していた。適宜、ダブルやミラーリングなどの技法やテレなどの概念に対する説明も行いながらドラマを進めていた。毎回15～20名前後の参加者がおり、“常連さん”もできるなど、アットホームな場所となっていた。2014年度に先生が1年間の研究休暇を取られた際には、“常連

さん”を中心に自主的なサイコドラマの研究会が開かれていたことがそれを物語っている（現在もその研究会は継続されている）。様々な人たちの交流の場になること、そして何よりもご自身の研鑽の場として、先生が大切にされていた場であった。